



No.26 2004.5.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

フォーラム	歴史と景観を活かした街づくり“みなとみらい21”	矢野 徹 1
土木史ニュース	水の歴史遺産を活用 背割下水と道頓堀川	有井 宏子 3
地域のニュース	土木遺産と教育活動～総合的な学習の時間「野蒜築港とこれからの浜市」	鈴木 和恵 4
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河大次郎 5 阿部 貴弘
学会の動き	第24回土木史研究発表会のお知らせ	6
土木史関係図書	日本土木史総合年表、岩波日本庭園辞典、百折不撓・鉅毒の川はよみがえった 他	横松 宗治 8

フォーラム (特集連載:土木遺産とまちづくり)

歴史と景観を活かした街づくり“みなとみらい21”

横浜市港湾局 矢野 徹



開港の地横浜

横浜は、安政6年(1859年)、日本で初の国際貿易港として開港した。本年は日米和親条約の締結(1854年)から150年目となり、5年後の平成21年には横浜港開港150周年を迎える。条約調印の場となった横浜村は、戸数わずか100戸ほどの半農半漁の寒村であったが、現在は人口350万人を擁する大都市へと変貌を遂げている。

みなとみらい21事業等の整備が進められているインナーハーバーエリアは、まさに、横浜港が開港し、日本を代表する国際港湾都市へと発展を遂げる舞台となった場所でもある(写真1)。しかし、昭和40年代以降は船舶の大型化や貨物のコンテナ化などにより、本牧や大黒など外縁部のふ頭港に港湾機能を譲ることとなった。そのような歴史から横浜都心部には、港を中心に都市の発展を支えてきた土木遺産や、昔ながらの銀行、商社、教会等の建造物が存在し、かつての横浜を偲ぶことができる。

みなとみらい21事業

みなとみらい21事業は、関内・伊勢佐木町地区と横浜駅周辺地区に二分化されていた本市都心部を、埋立て等により一体化させ、約186haのエリア



写真1 みなとみらい21 全景

に業務・商業・文化・コンベンション・アミューズメント施設の集積を目指している。これにより、近年、東京に一極集中している就業の場等を横浜に創出し、本市経済の活性化や経済基盤を確立し、都市としての自立性の強化を図るものである。

中央地区

みなとみらい21中央地区は、かつてあった造船所や鉄道のヤードを移転させ、その前面を埋め立て土地造成を行い、道路や公園・緑地等基盤施設の整備を図っている。

造船所の移転に際して、地区内にあった旧横浜船渠株式会社の石造1・2号ドックを、当事業の

中で保存活用している。1号ドックは、日本丸メモリアルパークとして昔の姿を保ちながら、帆船日本丸を浮かべ保存されており、平成12年には国の重要文化財に指定されている。

また、2号ドックは、明治29年(1896年)に建造された現存する商業用石造りドックとしては国内最古のものである。ランドマークタワーの建設により、一度解体されたが、建設後、位置を若干ずらし、ドックヤードガーデンというイベントスペースとして復元されている。

新港地区

みなとみらい21新港地区は、大さん橋の前身である鉄さん橋の建設に続き、横浜港の第2期築港事業により整備された。岸壁、鉄道、発電所、起重機等を有した、我が国初の近代的な島式ふ頭として明治32年に着工、大正3年に完成した。以後、横浜港の貿易の中心的役割を果たしてきたが、みなとみらい21事業により、ふ頭から街へと機能を転換することとなる。ここでも、近代港湾発祥の地として、数々の歴史的な建造物が存在し、それらを保存活用した街づくりが行われている。その代表的なものが、赤レンガ倉庫を中心とする赤レンガパークの整備である。

赤レンガ

赤レンガ倉庫(写真2)は、明治末期から大正初期に建築されたレンガ組積造としては我が国最大級の建築物である。当初横浜税関が管理していたが、戦後の米軍接収を経て、昭和57年頃まで倉庫として利用されていたものを、平成4年に本市が取得した。構造補強、屋根・外壁の改修を行い、1号倉庫をホール・多目的スペースのある文化施設、2号倉庫をレストランやショップの集まった商業施設として保存活用し、平成14年にオープンした。その周辺の赤レンガパークでは、倉庫建造当時の石畳を残し、関東大震災で倒壊した税関事務所の基礎の遺構を花壇として保存している。また、東京駅との旅客列車が発着していた。横浜港駅のプラットホームも保存・復元している。



写真2 倉庫と周辺空間を再整備した赤レンガパーク

汽車道

平成9年にオープンした汽車道(写真3)は、桜木町駅から新港地区への歩行者の主動線として利用されている。明治44年に、新港ふ頭への貨物輸送を目的に敷設された臨港鉄道の跡地を延長500mのプロムナードとして再整備したものである。敷設当時のアメリカ製トラス橋を改修し、線路をボードウォーク内に残すなど、貨物輸送で活躍していた当時の雰囲気と、水辺と一体となった景観を創出している。

開港の道

山下臨港線は、昭和38年の山下ふ頭の完成にあわせ、山下と新港ふ頭を高架橋で結ぶ鉄道として建設された。その後、貨物輸送が鉄道からトラックにシフトし、昭和60年頃から遊休化していたが、平成14年に、この鉄道高架橋を再利用し、新港地区から山下公園へ至る部分をプロムナードとして整備した。ビルの2から3階レベルで港の景観を一望できる散策路として多くの観光客で賑わっている。桜木町駅前から汽車道、赤レンガ倉庫、山下臨港線プロムナード、山下公園を経て、港の見える丘公園に至るルートに「開港の道」と命名し、初めて横浜を訪れる人も路面表示や距離表示サインにより、分かりやすく散策できるように整備している。

あとがき

平成14年度における実績を見ると、赤レンガ倉庫へは開業後1年間で680万人が訪れた。また、みなとみらい地区全体の来街者は、関内・山下方面との回遊性が高まったこともあり、前年から500万人増加し4,100万人となり、予想以上の賑わいをみせた。

周辺には他にも、数々の土木遺産や歴史的な建造物があり、これらは、横浜市が開港以来築いてきた都市の文化を人々に伝えるとともに、今後更に、本市街づくりの魅力形成を図っていく上で、大変貴重な資産となっている。



写真3 鉄道敷を遊歩道として再活用した汽車道

水の歴史遺産を活用 背割下水と道頓堀川

大阪府教育委員会 有井 宏子

大阪市内は、町がめまぐるしく変貌をつづけている。そのため、この町の基礎がつくられた豊臣時代を偲ぶ縁は復元された大阪城だけ、と思われがちである。

しかし、目にはつきにくい、城下町「大坂」の生活基盤は、今も着実にこの町を支えている。

中央区船場界隈の地下には、大坂城築城に伴って天正 11(1583)年から整備が始まった「背割下水(太閤下水)」が現存する。基盤の目状に整備された道路に面して入口をもつように配置された建物が背中合わせになった部分を通ることから、「背割下水」と呼ばれる開渠下水道であった。大阪市制発足時には総延長約 350km に及んだこの排水路は、大阪市下水道として引き継がれ、約 20km は今も現役の下水道として利用されている。

大阪市立南大江小学校では、元禄時代の古絵図にも描かれた見事な石積みの背割下水が見学できる(写真 1、大阪市下水道技術協会への予約が必要)

現在、背割下水は暗渠化され、その上が路地になっているところが多い。この歴史性をもつ路地をまちづくりに活かそうというプロジェクトが、船場のまちづくりグループを中心に進められている。まず手始めに、路地に面した店舗をオープンさせ、好評を博している。

このグループは、まちづくりシンポジウムを開催し、現在使用されていない背割下水の一部を掘り返して上水を流す親水公園が作れないか、などの提案を積極的に行なっている。



写真1 見事な石積みの背割下水

民主導の背割下水活用計画以外に、大阪市内では、官民一体となって「水の都 大阪」を再生するプロジェクトも進められている。

大阪市の中央を東西に流れる道頓堀川は、慶長 17(1612)年から 3 年かけて開削された。舟運が衰えたとはいえ、その両岸は、今日に至るまで大阪随一の繁華街「ミナミ」の中心である。サッカー W 杯や阪神タイガース優勝時に多数の若者が飛び込んで、全国的に有名になった道頓堀川であるが、その水質汚染は深刻で、高い護岸と相まって、人から切り離された水辺空間となっている。

大阪府が計画を進めている「河川環境整備事業(道頓堀川)」は、道頓堀川の両岸に遊歩道や広場などの親水空間を設け、憩いの水辺空間をつくりだそうというものである。これは、水との密接な関わりのなかで育まれてきた「水の都大阪」の歴史を活かす都市再生プロジェクトの一環である。

この事業の特色は、地元商店街や住民のみならず、関西の経済会や NPO の提案も積極的に取り入れようとしている点にある。色々な立場からの意見を求めることによって、ユニークな構想が次々に打ち出されている。その成果の一つに、国に規制緩和を働きかけて、遊歩道にカフェテラス等を設置して営利活動も可能にしようという全国初の試みがある(写真 2)。

官民が協議を重ね、歴史的遺産を中核にまちの再生を計る取組みが、イギリスにおける都市再生事業のキーワード「city pride」を大阪で確立する原動力になることが期待される。



写真2 都市再生プロジェクトの一環である道頓堀川整備(構想)

土木遺産と教育活動 ～総合的な学習の時間「^{のびるちっこう}野蒜築港とこれからの浜市」

鳴瀬町立浜市小学校 教諭 鈴木 和恵

各校の特色を生かした創意工夫のある柔軟な教育活動の展開が求められる総合的な学習の時間。「地域の素材を生かして」という学校方針のもと、6 学年テーマとして着目したのが日本初の洋式近代港湾建築事業「野蒜築港」であり、平成 12 年度より取り組み始めた。巨額を投じた国家直轄の一大事業であったが、知名度は高くなかった。しかし、ここ数年、案内標示板の設置、運河交流館の開館、フォーラムの開催等、にわかに野蒜築港に関する話題が盛り上がりを見せてきた。

社会科で日本史を学習する 6 年生にとって、地元の歴史や現状を理解することは重要であり、21 世紀を担う子どもたちが地元への理解と関心を深め、今後の地域づくりを真剣に考えていくことに意義があると考えた。

学習の導入では、野蒜築港を長年研究している方々を講師にしてお話をうかがったり、野蒜築港跡を見学したりして、野蒜築港への関心や野蒜築港について調べたいという意欲を高める。そして、この先行共通体験で興味や疑問をもったことについて個人毎に課題を設定する。調べる活動においては、地域の方々への聞き取り調査も行った。120 年前の出来事であるので、築港当時の様子を直接知る人はもはや存在しない。しかし、代々浜市に住んでいて聞き伝えて知っている人、築港跡で遊んだ経験のある人、築港のためにこの地域に移り住んできた人たちの子孫等が住んでおり、その方々に聞き取り調査を行うことで、浜市の歴史の新たな一面を知ることができた。同時に、地域の方々とのコミュニケーションを図ることができたのも成果の一つである。行事等との関連を図り、意欲が持続することも心がけた。修学旅行では野蒜築港と同様に安積疏水にも携わっていたファン・ドールンの銅像や十六橋を見学し、学芸会では野蒜築港を題材とした劇に取り組んだ。劇への取り組みは、それまでとは違った角度から野蒜築港について考えるきっかけとなり、相乗効果を得られた。何より、劇を見た保護者や地域のみなさんに、野蒜築港について知っていただけたことは、大きな成果であった。発表

する活動では、校内発表だけでなく、土木学会主催のフォーラム等で発表する機会も与えていただいた。地域の皆さんをはじめ多くの方々の前で発表したことは、子どもたちにとって貴重な経験となった。

3 年間の実践の初年度は、野蒜築港そのものに視点をあてた学習を行い、2 年目は少し視野を広げて近隣県との関わりを学習に取り入れた。3 年目は明治三大築港に着目し、他の港と比較することで、野蒜築港を違った角度から見つめ直すことができた。

「野蒜築港」という言葉すら知らなかった私が、なんとか学習を進めていくことができたのは、多くの方々の協力があつたからである。地元で野蒜築港を研究なさっている方々、大学や高校の先生方、一緒に活動した工業高校の生徒の皆さん、船を出してくださった漁協の方々、聞き取り調査にご協力くださった地域の方々、そして、資料を提供してくださった方々など、多くのみなさんの全面的なご協力がこの学習には不可欠であった。

この学習を通して、子どもたちが真剣に地域のことを考え、自分たちの手でこれからの浜市をつくり上げていくのだという決意を強くもってほしいと願う。そして、地元には誇れるものがあるのだという自信をもって、地域づくりに利活用して行ってほしい。折しも、野蒜築港跡の公園化構想が実現化の兆しを見せている。また、つい先日、野蒜築港跡から近代的下水道「悪水吐暗渠（あくすいばきあんきょ）」の遺構が発見され、新聞やテレビを賑わせた。野蒜築港への興味はまだまだ尽きるところを知らない。野蒜築港という地域の宝を次世代の子どもたちに伝えていくことが、地元小学校の一教員としての使命であると思い、これからも、子どもたちとともに学習活動に取り組んでいきたいと思っている。



野蒜築港 120 年フォーラムでの発表



学芸会：築港工事の様子を演じる子どもたち



平成 14 年

修学旅行：安積疏水十六橋ファン・ドールン像前で

文化財ニュース

文化財となった土木関連建造物等一覧

登録有形文化財（平成15年11月答申分）

所在地	名称	建設年代	特徴
埼玉県秩父市	秩父鉄道御花畑駅舎	大正6年	秩父・影森間に建設された平屋建の駅舎。線路側に小屋組をキングポストトラスとしたホームの上屋を一体的に築く。
福井県勝山市	えちぜん鉄道勝山駅本屋	大正3年 / 昭和初期増築	1階を洋風の縦羽目板張ベンキ塗、2階を和風の白漆喰塗とする。地方鉄道における駅舎本屋の好例。
	えちぜん鉄道勝山駅ホーム待合所	昭和初期	桁行6間、梁間1間、切妻造で外壁を縦羽目板張とした。建設当初の姿をほぼ留めた鉄道施設。
愛知県犬山市	明治村六郷川鉄橋	明治10年 / 大正4年・昭和63年移築	英人技師ポイルの設計による6連の100ftポニーワーレントラスを1径間分移設復原した。我が国で最初期の鉄道橋梁。
	明治村鉄道寮新橋工場	明治5年頃 / 大正8年・昭和43年移築	並列二棟の切妻造とした鉄造平屋建の工場建築。外壁から小屋組、サッシュまで鉄材でつくる。
	明治村小瀬沙美鳥燈台	明治37年 / 昭和51年移築	広島県沖美町に建設された鑄鉄造、全高6mの灯台。燈籠に8面の曲面ガラスを組み込む。
	明治村天童眼鏡橋	明治20年 / 昭和51年移築	山形県天童市に建設された石造2連アーチ橋。三島通庸の主導した土木事業の遺構の一つ。
	明治村隅田川新大橋	明治45年 / 昭和50年移築	3連の鋼製プラットトラスの1径間のうち、4 / 10を移設したもの。東京市土木課の設計で樺島正義の関与が伝えられている。
	明治村皇居正門石橋飾電燈	明治26年頃 / 平成2年移設	青銅製、高さ2.7mの電灯で、獣足を踏張らせた脚部の上に、アーチ形蛇腹、旭日、獅子などをあしらう。設計は河合浩蔵。
	明治村名鉄岩倉変電所	明治45年 / 昭和50年移築	愛知県岩倉市に建設された煉瓦造平屋建の旧変電所。天然スレート葺、切妻造。妻入で壁面に半円アーチの開口部を設ける。
三重県鈴鹿市	旧北伊勢陸軍飛行場機体	昭和18年頃	旧陸軍が建設した旧戦艦機格納庫。鉄筋コンクリートでスパン30メートルのアーチをつくる第2次世界大戦末期の遺構。
熊本県小国町	旧国鉄宮原線廣平橋梁	昭和12年	久大本線の恵良駅から分岐し肥後小国駅に至る旧宮原線の施設。設計は鉄道省熊本建設事務所。鉄材節約という当時の国策に応じた一連の無筋コンクリート造アーチ橋で、山間部の近代化を象徴的に物語る。中でも幸野川橋梁は、スパンドレルに半円アーチを穿つ、丁寧なつくり。
	旧国鉄宮原線菅迫橋梁	昭和12年	
	旧国鉄宮原線堀田橋梁	昭和13年頃	
	旧国鉄宮原線汐井川橋梁	昭和13年頃	
	旧国鉄宮原線堂山橋梁	昭和13年頃	
	旧国鉄宮原線北里橋梁	昭和13年頃	
	旧国鉄宮原線幸野川橋梁	昭和14年頃	
宮崎県日南市	堀川運河護岸	明治期～昭和前期	広渡川と油津港を結び油津界隈をほぼ南北に貫流する運河の護岸。石段、物揚用斜路を設け、陸路との有機的な繋がりに留意して建設される。
	広渡川石堰堤	江戸中期 / 昭和初期増築	堀川運河の起点に築かれた堤長30mの石造堤で、運河開通時の景観を今に伝える貴重な遺構。
	花峯橋	昭和4年 / 昭和25年頃改造	橋長27m、幅員6mの、我が国に現存する数少ない木造方杖形式の道路橋の一つ。
宮崎県えびの市	享保水路井堰	明治39年 / 大正3年・昭和初期改修	川内川上流に築かれた享保水路の取水堰。堤長31m、堤高2mの精緻なつくりの石造堰で、石張の水叩を連続的に築く。
	享保水路太鼓橋	明治3年	井堰の約3km下流に位置する橋長34mの水路橋で、迫石を二重とし、スパンドレルではほぼ扇状に石を積む。
	雲龍橋	享保14年(1729)	石造単アーチの水路橋兼道路橋。迫石を二重に積み、アーチ下の水路底部に切石張を施すなど小規模ながら丁寧なつくり。
	大平落中橋	明治初期	享保水路の末端近くに位置する橋長2.1m、幅員4.4mの石造桁橋。周辺の市街化に伴い建設された。水路を跨ぐ道路橋。

登録有形文化財（平成16年1月答申分）

所在地	名称	建設年代	特徴
秋田県東成瀬村	田子内橋	昭和10年	ライズを押さえた径間長33mの開腹式RC造単アーチ道路橋。近藤正雄設計。
高知県吾川村	久喜橋	昭和10年	アーチ形をした支間長13mの桁を中心としたRC造の沈下橋。
高知県吾北村	高岩橋	昭和3年	簡素ながら橋梁全体で統一的な意匠が施された道路用のRC造桁橋。
宮崎県西郷村・諸塚村	塚原ダム	昭和13年	昭和前期の最新コンクリート技術を結集し我が国最大高を実現した水力発電用ダム。吉田徳次郎指導、山本格設計、間組施工。

登録有形文化財（平成16年3月答申分）

所在地	名称	建設年代	特徴
岡山県倉敷市	野崎武左衛門翁旌徳碑	明治27年	塩田王の功績を讃えた記念碑施設。旌徳碑は高18mのオベリスク型で、わが国で珍しいエジプト趣味の建造物。太鼓橋風の石橋、オベリスクの意匠を意識した門柱、精緻な石垣などいずれも質が高い。設計は、山田黄吉。
	野崎武左衛門翁旌徳碑石橋	明治27年	
	野崎武左衛門翁旌徳碑門柱	明治27年	
	野崎武左衛門翁旌徳碑石垣	明治27年	
佐賀県肥前町	旧杵島炭鉱大鶴鉱業所第二坑口	昭和11年頃	坑門と約7mの坑道からなる炭鉱施設。
鹿児島県鹿児島市	鹿児島県立鹿児島工業高等学校大煙突	大正9年	煉瓦造、高18mで、鉄製ボイラー一式で残る。

(文化庁 北河大次郎 パシフィックコンサルタンツ 阿部貴弘)

学会の動き

第24回土木史研究発表会のお知らせ

土木史研究委員会(委員長:中村良夫・東京工業大学名誉教授)では、下記の要領で第24回土木史研究発表会を開催いたします。多数の方々のご参加をお待ちしております。

記

1. 主催: 土木学会 (担当: 土木史研究委員会 <http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>)
2. 期日: 2004年7月3日(土)・4日(日)
3. 場所: 岡山大学 環境理工学部棟 1,2階 (岡山市津島中3-1-1、TEL: 086-251-8852)
交通アクセス: JR岡山駅(西口)の北約2km (www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm に詳述)
4. 参加費: 会員・非会員: 2,000円、学生会員: 1,000円 (当日会場にてお支払いください)
講演集(Vol.24)、論文集(Vol.23): 合わせて6,000円(昨年は講演集のみで6,000円)
当日会場にて申し受けます

7月3日(土)プログラム

時間	第1会場(101室)	第2会場(104室)	第3会場(201室)
9:45		開会挨拶 土木史研究委員会委員長 中村 良夫	
10:00	【橋梁Ⅰ(木橋)】 司会:小西 純一(徳州大学)	【都市】 司会:五島 寧(横浜市)	【水環境】 司会:藤井 三樹夫(水環境研究所)
1	近世東海道の橋梁について 伊東 孝(日本大学)・斎藤司・伊東孝祐	5 東京市区改正委員会における古市公威 神吉 和夫(神戸大学)	9 郡山市のため池の現状と水質等の調査 池田 昌弘(日本大学)・藤田龍之・知野泰明
2	享保期における江戸の橋の民営化について 松村 博	6 大正期の東京(市内15区)における地中配電に関する研究 鈴木 悦朗(杉山コンサルタンツ㈱)	10 長坂用水の沿革と現状 池本 敏和(金沢大学)・安達寛・河原清・景山和也・北浦勝
3	中国の木橋に関する歴史的研究 崔 建軍(岡山大学)・樋口輝久・馬場俊介	7 隅田公園の歴史の変遷 - 臨水公園の設計思想と空間の変化 服部 洋佑(早稲田大学)・佐々木 葉	
4	日本の木造トラス橋 安達 寛(金沢大学)・山下武秋・藤田美輝・住勲・北浦勝	8 先買型土地区画整理事業の変遷に関する研究 大沢 昌玄(日本大学)・会田裕一・岸井隆幸	
12:00			
13:30	【橋梁】 司会:中井 祐(東京大学)	【景観Ⅰ(景観変遷)】 司会:中村 良夫(東京大学)	【制度】 司会:北河 大次郎(文化庁)
11	東京・三多摩地域の橋梁の変遷 - 木・石・煉瓦の時代 - 紅林 章央(東京都建設局)・前田研一・伊東孝	15 近世以降昭和初期にいたる旅行記・文芸書における岡山に関わる風景描写の分析 森 尚彰(岡山大学)・樋口輝久・馬場俊介	19 近代創生期の日本財政と公共投資に関する史的的研究 田中 邦博(九州共立大学)・亀田伸裕・森信之
12	明治中期から大正期に掛けての我が国近代的吊橋構造の展開 山根 巖(石原工業㈱)	16 水防意識の変化に基づいた輪中地域の景観分析 中嶋 伸恵(岐阜大学)・田中尚人・秋山孝正	20 フランス革命初期の土木局と工兵団の統合問題についての研究 根岸 美幸(京都大学)
13	錦帯橋の構造特性に関する歴史的考察 依田 照彦(早稲田大学)・赤木頼太・森本博行	17 東京の都市建設における「美観」と風景の問題について - 明治末期から大正初期にかけて - 馬木 知子(東京工業大学)	21 清末民初における鉄道建設と日本 その1.小川資源の鉄道考察と瀬田鉄道の建設 徐 蘇斌(国際日本文化研究センター)
14	中国漢代におけるアーチ構造の出現 菊地 雅彦(北京大学)	18 横浜港戦後史における山下公園 林 陽子(東京農業大学)・小林 章	
15:30			
15:45	【橋梁】 司会:佐々木 葉(早稲田大学)	【景観Ⅱ(地域景観)】 司会:田中 尚人(岐阜大学)	【人物】 司会:藤田 龍之(日本大学)
22	わが国におけるコンクリートアーチ橋の発展 紅林 章央(東京都建設局)・前田研一・伊東孝	25 愛知県瀬戸市の窯垣に関する調査研究 小池 則満(愛知工業大学)	28 開成学校諸芸学校の歴史的意義について 北河 大次郎(文化庁)
23	大正12年竣工の東京神田川昌平橋 白井 芳樹((財)道路空間高度化機構)	26 徳島・佐古川における青石の石垣の形成と展開 三宅 正弘(徳島大学)・庄野武朗・市川宏規	29 初期の神戸水道計画におけるイギリスの影響 - パルトンと佐野藤次郎の設計思想 - 松下 真(神戸市水道局)
24	周辺環境との関連性から見た帝都復興橋梁の形式選定原理の考察 福島 秀哉(東京大学)・中井祐	27 札幌市南部住宅街における水源地公園の保存と利用 足達 健夫(専修大学)	30 電力土木の歴史 第2編 電力土木人物史(その12) 稲松 敏夫(稲松技術センター)
17:15			

5. 懇親会 日時：7月3日(土)17:30～
 場所：岡山大学生協マスカットユニオン(環境理工学部棟より徒歩5分)
 参加費：4,000円程度を予定、参加方法：当日会場にてお申し込み下さい。

6. 「土木史研究(講演集)24」と「土木史研究(論文集)23」の事前販売のお知らせ
 発表会開催に先立ち、第24回研究発表会の講演集、ならびに、第23回研究発表会の論文集(審査付き論文集)(一括販売、6月発行予定)を販売致します。ご希望の方はFAXまたはE-mailにて、「氏名、送付先(〒、住所、所属名、TEL)、購入部数、支払方法」を明記の上、下記宛お申し込みください。販売価格は1組6,000円(+送料740円)です。
 申込先：土木学会土木史研究委員会(担当：橋本)
 FAX：03-5379-0125、E-mail：hashimoto@jsce.or.jp
 申込締切：6月11日(金)着分まで

7月4日(日)プログラム

時間	第1会場(101室)	第2会場(104室)	第3会場(201室)
9:30	【橋梁Ⅳ(海外編)】 司会:鈴木圭(鹿島建設)	【遺産Ⅰ】 司会:小林一郎(熊本大学)	【城郭石垣】 司会:北垣 暉一郎(元・東大版大)
	31 エヌビック社の橋梁建設政策について 本田 泰寛(熊本大学)・小林一郎・ミシェル・コト	34 鹿児島本線開通と橋瓦建造物 吉原 不二枝(鹿児島県 建設技術センター)	37 石垣模型肩部の静的荷重実験 小林 善勝(㈱小林木材工業)・新谷洋二・田中邦照・谷優作
	32 フォース鉄道橋の隠された歴史 片持梁と渡邊嘉一 三浦 基弘(東京都立田無工業高等学校)・前田研一	35 構造材料からみた熊本県の近代土木遺産の特徴に関する考察 高柳 正勝(熊本大学)・山尾敬孝	38 城郭石垣の安定性に影響する各種要因の検討 森本 浩行(京都市立伏見工業高等学校)・西田一彦・西形達明・玉野富雄
	33 ゴールデンゲート橋建設とチーフ・エンジニア、シュトラウスの研究 中川 良隆(東洋大学)	36 非破壊検査を用いた桁橋の調査と評価に関する考察 山尾 敬孝(熊本大学)・高柳正勝・重石光弘・水田洋司・宮村重範	39 FEM-3D(L27)による石垣の動的挙動の数値解析実験 田中 邦照(木更津工業高等専門学校)・新谷洋二・小林善勝・谷優作・木村真也
11:00	12:15	【ダム・港湾・海洋土木】 司会:松浦 茂樹(東洋大学)	【遺産Ⅱ】 司会:為国 孝敏(足利工業大学)
	40 白水堰堤の設計と建設について 松尾 和人(熊本大学)・星野裕司・小林一郎・本田泰寛	44 歴史的鋼橋の保存技術に関する研究 永田 礼子(早稲田大学)・佐々木 葉	47 伊都までの水行陸行と耶馬台国 小合 彬生(鉄道建設機)
	41 社会背景から見た近代日本における重力ダムの変遷 樋口 輝久(岡山大学)・馬場俊介	45 鹿児島県下に残る煉瓦アーチ暗渠を通してみる技術論 阿久根 芳(㈱大橋コンサルタンツ)・種田博・吉原不二枝・中島一誠・吉原達	48 近世東海道の交通 - 特に駄賃について 昌子 住江(関東学院大学)・大和田公一・藤村万里子
	42 近代日本の港湾における欧米諸国からの技術導入 井上 聖(岡山大学)・樋口輝久・馬場俊介	46 旧佐敷隧道と旧津奈木隧道の現状調査と今後の土木遺産としての利用促進に関する考察 二宮 公紀(鹿児島大学)・浅井利行・上田省吾・山尾敬孝	49 近世東海道の道路延長と一里塚の尺度について 木下 良(古代交通研究会)・武部健一・大沢聡
	43 明治時代の日本から米国への東京湾第三海堡建設技術の技術移転に関する研究 森永 真朗(国土交通省 関東地方整備局)・島崎武雄	番外 岡山と香川の近代化遺産調査の中間発表 (講演集には含まれておりません) 馬場 俊介(岡山大学)	50 近世東海道の並木について 藤村 万里子(防衛技術研究センター)・昌子住江・荒井秀徳・伊東孝祐
14:15	14:30	【河川】 司会:知野 泰明(日本大学)	【遺産Ⅲ】 司会:馬場 俊介(岡山大学)
	51 卓上水理模型を用いた釜無川信玄堤の流水コントロール技術検証の試み 和田 一範(国土交通省 国土技術政策総合研究所)・岡安徹也・市山誠・浜口重一郎	55 土岐川水系の発電所石造建造物に関する調査研究 茂吉 雅典(大同工業大学)・五島利兵衛・小澤優二	58 近世東海道の路線計画と道路構造について 武部 健一(道路文化研究所)・土井浩・石田稔
	52 わが国の聖牛の発祥にかける考察 和田 一範(国土交通省 国土技術政策総合研究所)・有田茂・後藤知子	56 近代土木遺産の保存・活用事業のプロセスと効果に関する調査研究 安田 和樹(早稲田大学)・佐々木 葉	59 近世東海道の維持管理について - 神奈川県における「湯除」の賦課範囲を素材に - 斉藤 司(横浜歴史博物館)・鈴木良明・藤井弘造・藤村万里子
	53 北陸扇状地河川における堰堤の変遷とその役割に関する研究 寺村 淳(新潟大学)・大熊孝	57 産業観光から見た土木遺産の魅力度評価方法に関する一考察 石井 雅修(足利工業大学)・為国孝敏	60 札幌千歳間道路改良工事の技術に関する研究 原口 征人(社)北海道開発技術センター)・三浦宏
	54 江戸期大和川川替の歴史経緯と旧大和川の河川様態 金岡 正信(大阪産業大学)・西田一彦・玉野富雄・飯田育功・中山繁・市川秀之・北川央・松井竜司	番外 鳥取県・神戸市の景観再現プロジェクトの中間発表 (講演集には含まれておりません) 馬場 俊介(岡山大学)	61 雪水路面対策の土木史的評価 浅野 基樹(独)北海道開発土木研究所)
16:30	16:45	締結及び閉会挨拶 土木史研究編集委員会委員長 馬場 俊介	

土木史関係図書

書名	著者・編者	発行所・発行日	定価(本体)
日本土木史総合年表	三浦基弘・岡本善喬著	東京堂出版	¥12,000
文字通り本邦初の本格的な土木史年表である。縄文から現代にいたる土木関連分野の事象が網羅された。分野別の索引は、土木史家のみならず、専門別の研究者にも利便性が高い。年表とは別に加えられた70数こまのコラムは、これだけで“土木歴史物語”をなすものである。			
岩波 日本庭園辞典	小野健吉著	岩波書店・2004年3月19日	¥3,400
日本庭園史、文化財保存の専門家による著作であり、古代から近世の庭園の水系の仕組みに関する記述も豊富である。			
国づくりと研修第103号 (2004年冬)特集“博物館へ行こう”	「国づくりと研修」 編集小委員会編	(財)全国建設研修センター	問い合わせ先 03-3581 -2464
本誌は年4回発行されるが、土木史関係の記事も多い。定期購読をお奨めする。			
百折不撓 鉾毒の川はよみがえった	高崎哲郎	信山社サイテック 2004年2月26日	¥2,000
渡良瀬川鉾毒事件に迫るノンフィクション。それは、わが国の河川環境行政の原点であり、今日の川のあり方をも問う。			

(日本ランドデザイン 横松宗治)

編集後記 編集チームは2年ごとに編成替えになるが、その2年ごとに繰り返す話題がある。フォーラムの発行資金が不足する、つまり慢性的に赤字ということである。対策のあれこれもまた繰り返しテーブルにのる。いわく購読費をいただく、メール配信に代えよう、さらに発行回数を減らそう、である。購読費は学会の性格上いただけないらしい。メール配信は、やはり“熟読に値する中身にそぐわない。発行回数は、年3回が最小だろう。と堂々巡りのなかであきらめの気分が漂う。編集委員にはこれ以上のアイデアがない。読者諸賢の“ひざをたたく”妙案を期待するしかない。(横松)

土木史フォーラム No.26

監修：土木学会土木史研究委員会
発行：土木史フォーラム小委員会
代表者 横内 憲久(日本大学)
事務局：日本大学理工学部 岡田 智秀
〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
TEL&FAX.047-469-5427(直通)
Email : t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp
<http://wf.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>
印刷：(株)青孔社

CONTENTS

-FORUM Yokohama Minato Mirai 21 ~ City planning with the best use of its history and landscape	YANO Toru 1
-NEWS Utilizing of water engineering heritages ~SEWARI- sewerage and Dotonbori river	ARII Hiroko 3
-LOCAL NEWS Civil engineering heritages and education ~Nobiru port and the future of Hama city	SUZUKI Kazue 4
-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List	KITAGAWA Daijiro , ABE Takahiro 5
-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering) Program of 24 th conference of CHSCE	6
-BOOK GUIDE	YOKOMATSU Muneharu 8

編集委員会：委員長 横内憲久、幹事長 知野泰明

委員 阿部貴弘、岡田智秀、橋本光行、日野 智、榭山清人、山田圭二郎、横松宗治 学会事務局 橋本剛志